

池田家に伝わる「時義略論」

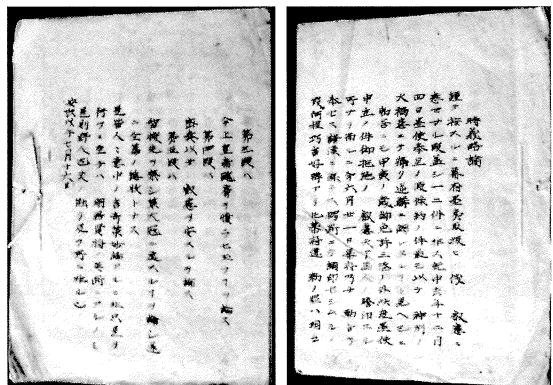
東京指月会事務局長 三浦孝夫（萩高20期、43年卒）

渋谷区初台の池田和子さんを訪ねたのは5月の連休中だった。私の故郷（阿武町奈古）に幕末当時、豪農で村役人を務めた池田家があった。和子さんはその8代目当主、俊彌氏（故人）夫人である。昨年、同郷の士と「東京ふるさと阿武町会」を立ち上げた私は、今年6月の大会に、故郷ゆかりの方を招きたいと思い、調べを進めたところ、池田和子さんの存在を知ったのだ。電話をすると、家に古い本が残っているとされるので、ぜひ拝見したいと申し上げ、この日の訪問になった。

ずっとしまったままになっていたという梱包を解いてみると、論語や易経などの経書、日本外史などの歴史書などにはさまって、堅折りした和紙7丁（14ページ分）をこよりで綴じた手稿本があった。タイトルには「時義略論」とあり、調子のよい漢字カナ交じり文がページを埋めている。文中には誤字の訂正が2カ所あることから、これが写本であることが知れた。

文面を読み進んでいくと、幕府が朝廷の許可を得ずに「墨夷」（アメリカ）との条約（日米修好通商条約）に調印したのは大罪である、と激しく非難し、幕府に使者を送ってその非を諫争するとともに、朝廷にも密使を派遣してお守りすることを約束し、もし幕府が敵対してきてもひるむことなく、500人の親兵を出し、天皇を比叡山に移して戦え、と主張している。この論者が訴えている相手は明らかに長州藩である。つまり、これは、長州藩への建策であることがわかった。では、その著者はだれなのか。文末には安政戊午（安政5年＝1858年）七月十六日の日付があるのみで、著者の署名はない。恥ずかしいことに、私は「時義略論」の著者が誰であるか知らなかった。池田家を辞した後、いろいろ調べてみて、それが吉田松陰の建策であることを知ったのである。

その時、私は二重の感動にひたった。ひとつは、いうまでもなく、松陰の文章にふれたことだ。簡にして要を得、リズムカルで、実に説得力がある。松陰の感化力の強さを実感した。いまひとつは、この写本が池田家に今日まで伝えられてきた、という事実だ。幕末維新を生きた5代目当主の梁蔵は、須佐の育英館で小国融蔵に学び、京に出て貫名海屋の門を叩いた。尊王思想に共鳴し、家督を弟に譲って国事に奔走、徳山藩（奈古は江戸時代を通じて徳山藩の領地だった）に召し抱えられ、明治2年にはロンドン渡航を果たした先覚者だった。「時義略論」に鼓舞され、その写本を子孫に残したのが梁蔵であることは間違いない。「郷土の志士、池田梁蔵」の確かな証だ。梁蔵は欧州からの帰国直後、惜しくも病没したが、その波乱に富んだ生涯を私はいま、探索中である。



「時義略論」の写本の先頭ページ(右)と最終ページ(左)